

## <ラウンドテーブル報告1>

### 初年次教育における職員の役割について

#### —職員主体と教職協働 第5報—

【企画者】 藤本元啓(崇城大学)  
【司会者】 藤本元啓(崇城大学)  
【話題提供者】 出口良太(中部大学)  
池ヶ谷浩二郎(創価大学)

#### 1. はじめに

今回は中部大学と創価大学から職員が正課課外授業に参画する事例を話題として提供いただき、初年次学生に対しての教職協働による支援体制の実例や課題について、意見交換を行った。以下に、報告の内容を掲載しておく。

#### 2. 中部大学「導入教育としての新入生恵那研修」～職員の視点から～

##### (1) 新入生恵那研修実施の経緯と趣旨

本学は1964年に中部工業大学という校名で工科系単科大学として開学し、その後1984年に経営情報学部・国際関係学部が開設され、校名も現在の「中部大学」へ変更された。現在は7学部(工・経営情報・国際関係・人文・応用生物・生命健康科・現代教育)26学科、大学院6研究科(工学・経営情報学・国際人間学・応用生物学・生命健康科学・教育学)で構成され、合計約11,000名の学生が在籍している。

新入生恵那研修(以下「恵那研修」という)は、本学の恵那キャンパス(岐阜県恵那市)に研修センターが完成した1976年より、所属学科の教員・上級生と寝食を共にし、スポーツや懇親会を通じてコミュニケーションを図ることで、新入生を早い段階で大学生活に馴染ませるといった趣旨の下、入学直後の4月初旬から学科毎に1泊2日の行程で実施さ

れている新入生行事である。

その後、総合大学になったことに伴い、全学科の研修終了までに1カ月以上かかるようになり、単なるオリエンテーションという趣旨だけでなく、学科の自主性にに基づき、建学の精神、基本理念、学部・学科の教育目標を新入生に理解させる導入教育の場となった。

また、学科に所属する上級学年の学生を「初年次ピアサポーター」(以下「ピアサポーター」という)と呼ばれるアシスタントとして登用し、ピアサポーター自身の人間的成長を促すことも本研修の目的の一つとなっている。

##### (2) 恵那研修の運営体制・教職員の役割

恵那研修は学生教育部教務支援課が所管部署となり、教員2名(教務部長・教務部長補佐)および担当職員2名が運営に携わっている。その中で、教務部長・同部長補佐の2人は、事前の各種説明会やリハーサルでの研修の趣旨・目的説明のみならず、スーパーバイザーとしてピアサポーターに求められるコミュニケーション力やリーダーシップ力等のスキルアップ研修といった、教育的要素を含む事項を担っている。

一方、担当職員は資料作成や研修計画書類の確認、また各説明会やリハーサルにて事務手続きに関する説明等を行う他、研修日程の調整や移動用バスの手配を行う。更に、参加学生の食物アレルギーの有無や特別対応が必要な学生に関して、当該学科や研修センター

【表1】 恵那研修実施スケジュール

①恵那研修委員選出・説明会	11月上旬・下旬
②ピアサポーター選出	12月中旬
③ピアサポーター全体説明会Ⅰ	1月中旬
④ピアサポーター全体説明会Ⅱ	2月下旬
⑤恵那研修リハーサル	3月上旬
⑥恵那研修	4月上旬～5月中旬
⑦恵那研修振り返り	研修終了後随時

の職員と情報を共有し対応を考慮する等、幅広く研修運営に携わっている。

ただし、前述のとおり恵那研修は学科の自主性に基づく導入教育の場であるため、各学科所属教員・ピアサポーター・学部事務室所属職員との連携が必須となる。

恵那研修委員(学科所属教員)およびピアサポーターは、学科の責任において選出される。恵那研修委員は、事前準備段階からピアサポーターの指導にあたり、研修が適切に遂行されるようすべてを統括する立場にある。また、学科主任、同主任補佐、1年生指導教授は恵那研修に同行し、研修委員と協力してピアサポーターならびに新入生の指導にあたる。ピアサポーターは、各学科入学定員の1割を上限に、自薦・他薦・教員からの指名といった学科独自の方法で選出される。恵那研修委員指導の下、自分たちが主体となり研修内容を立案し、3月のリハーサルにてスケジュールの検証を行い、研修本番では企画の説明・進行・その他運営の全てを担当する。

恵那研修には職員1名が付き添うことになっているが、学部・学科の特徴を十分理解しており、教員との連携が図りやすいという理由から、学部事務室所属職員が主にその役割を担う。また、学生支援系の部署に所属する比較的経験年数の浅い職員が引率することもある。職員は全学科共通となる学生生活に関するガイダンスを実施し、その他教員とピアサポーターが適切且つ円滑に研修を遂行できるようサポートする。病人やけが人が発生した場合や、その他突発事項が発生した場合は、付添職員が中心となり、所管部署ならび

に教員と連携しながら、病院搬送や保護者への連絡等の対応が必要となるため、職員には調整力・判断力が求められる。こうしたことから、特に入職年数の浅い職員にとっては、本研修がよきSDの機会となり得る。

### (3) 研修の成果

教員・職員協働の下、ピアサポーターに研修の企画・運営を担当させることで、恵那研修は総じて「行動力」「自己解決力」「指導力」等、リーダーとして必要とされる要素を身に付けるよい機会となっている。また、新入生にとっても、所属学科の身近な先輩から助言や手助けを受けることで、より早期に大学生活に馴染むことができると共に、ピアサポーターを「ロールモデル」として自らの目標にすることで、恵那研修が「リーダー育成サイクル」形成の場となっている学科も存在する。

### (4) 今後の課題

恵那研修はピアサポーター・教員・職員の三者が相互に支援しながら運営されている。しかしながら、それぞれの役割について明確に区分することは困難であり、教員がピアサポーターの自主性を促すところから段階的に指導し、結果的に教員の負担が大きくなってしまっている学科もあれば、研修の遂行を優先することで教員が主体的に運営してしまい、必ずしもピアサポーターの成長につながらない学科もある。一方、職員はこうした「学生指導」に関わる事項については介入が難しく、教員に一任してしまう傾向にある。

所管部署に所属する職員の立場としては、恵那研修が学科主体の新入生行事であることを前提とした上で、各学科が2つの趣旨(①新入生の導入教育、②ピアサポーターの人的成長)のバランスが保持できるよう包括的支援を担う必要がある。そのためにはピアサポーター・教員のニーズに耳を傾けると共に、必要に応じて学科の運営方法や体制の改定に向け積極的に舵を取っていくことが、今後の課題と考えられる。

### 3. 創価大学「総合学習支援センター(SPACe)で展開する初年次へのアプローチ」

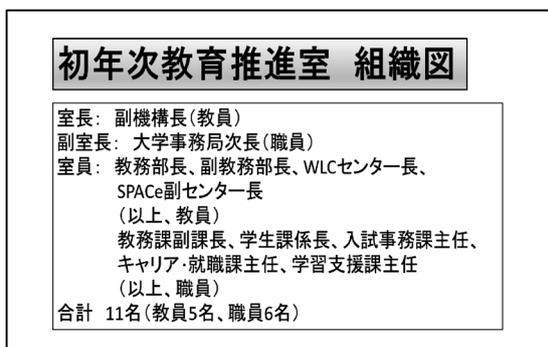
#### (1) 創価大学における初年次教育

本学の初年次教育への取組みは、1990年代前半の宿泊型ガイダンスから始まり、初年次の演習形式など変遷し、現在は、複数学部での初年次の基礎ゼミを開講し、7学部(国際教養学部は除く)においてアカデミックライティングを必須科目として開講している。

そのような中、本学グランドデザイン Ver1.5において初年次教育推進室の設置を掲げた。長年実施してきた入学時のプレイスメントテストを、IR室がスコア分析、傾向分析をする中で、初年次教育における入学前教育の重要性が浮き彫りになってきた。

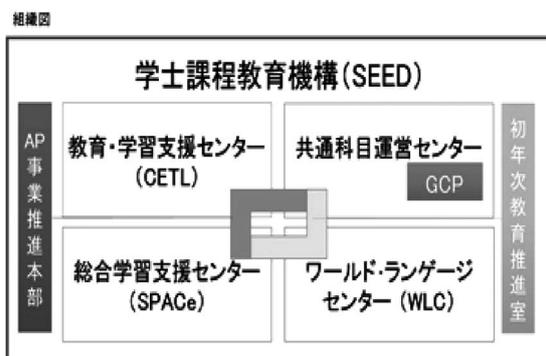
そこで、2016年2月、初年次教育ワーキンググループを設置し、①本学の初年次教育の現状分析にもとづく改善項目の提示と、その改善項目について他大学(ベンチマーク)の比較、②新たな入試制度の下での初年次・導入教育の在り方の提案、③学士課程教育機構を中心とした初年次教育推進体制案の提示の3点を検討した。

2016年11月の学長答申を受け、現在、「初年次教育推進室」が、初年次に関わる関係部局によって構成されている。構成員は、教員とともに教務部、学生部、キャリアセンター、入試事務、学習支援の職員で組織され、審議・検討事項により、学部代表、教育・学習支援センター(以下、CETL)、図書館事務室などが加わり、初年次教育と入学前導入教育の検討、提案、推進を担っている(以下、組織図)。



#### (2) 初年次における総合学習支援センター(SPACe)の位置づけ

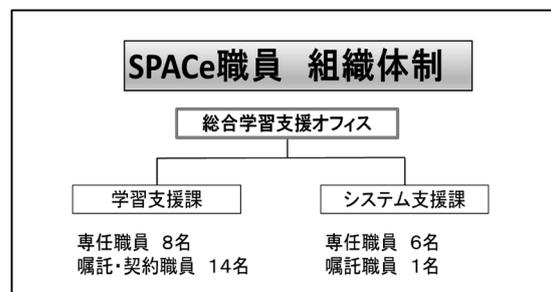
2010年に学士課程教育機構が設置された。この組織の設置は、本学創立50周年を目指したグランドデザインの教育戦略の中核を担う一つであった。その後、総合教育棟(以下、中央教育棟)の2013年秋完成を目指し、事務組織改編(学習支援を推進する総合学習支援オフィスの新設)と中央教育棟2階のラーニングコモنزの運用体制を整備し、機構内に総合学習支援センター(以下、SPACe)を設置した(以下、組織図)。



これまで各学部事務室で展開していた入学前導入教育を2016年後半より、SPACeが業務担当することにより、入学前教育から初年次への一貫した業務の流れが整備された。これにより、初年次におけるSPACeの位置づけがより明確になったと言える。

#### (3) 初年次教育におけるSPACe職員の役割

SPACe職員の組織体制は、学習支援課とシステム支援課の2課で1オフィス(部)となっている(以下、組織体制)。



上述したように入学前導入教育から初年次を担当するSPACe職員の役割は、多面性を

求められている。

本学は文科省補助事業であるスーパーグローバル大学創生支援事業と大学教育再生加速プログラムに参画している。2つの事業を推進する上でも、入学前には、TOEIC 対策強化、国語、数学のリメディアルの導入教育を進めており、入学前教育の対応も職員の役割となっている。

また、初年次における学習サポートは、SPACeの学習支援サービスが重要なポジションを占めている。SPACeでは、教員、職員、学生が協働して初年次教育の支援をしている。よりスムーズなサポート体制のために、毎週定例の打合せを通じ、学習支援、サポートの情報共有、進捗状況を確認する。その中、職員がSPACe利用状況をデータ分析し、初年次における利用実態から学習サポートの情報提供、提案をしている。学習支援は教員だけでなく、職員も積極的に関わり、サービス向上に努めている。

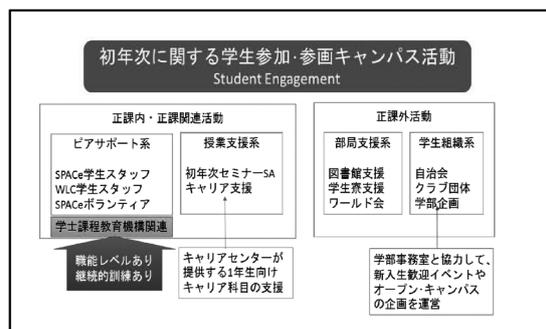
さらに、SPACeにおけるレファレンスは、図書館司書を有する専任職員がおり、初年次必須科目(学術文章作法)と連携したサービス提供を職員がレファレンサーとして積極的に関与する取組みをしている。

このように入学前導入教育から初年次へと推進、サポートに取り組むために、SPACe職員には多くのスキルが求められている。現状では、目一杯の状況で回しているのが実態であるが、語学力、情報分析力、専門性など多面的なスキルを有する人材の恒常的な確保が求められ、今後の課題となっている。

#### (4) 初年次サポートの特色と職員の取組み

最後に、全学的な特色ある初年次サポートとその職員の取組みもあるので、紹介したい。

以下の「初年次に関する学生参加・参画キャンパス活動」に示したように、「正課内・正課関連活動」と「正課外活動」ともに、教職員・学生が相互にサポートしながら活動を展開している。これは、開学当初から実施している「教職学の三位一体の大学運営」である。



2016年には、自治会、クラブ活動、男女学生寮(混住寮含む)、各学部企画など正課外活動においてバランスのとれたピアサポートのできる学生リーダーを養成する「スマートリーダーシップ(I~III)」を科目開講した。

また本年度、職員の関わりにとって、初の試みとなる取組みがある。2018年度(本年9月実施)AO方式による新入学試験制度「PASCAL(パスカル)入試」において教職協働で試験を行う。LTDのグループワークにおいて、各試験教室に教員とともに、職員が試験補助をする。これは、本学がどんな学生を求め、どのように教育しようとするのか、教員・職員で意識共有されることにより、より職員の関与と意識が重要となる。

#### (5) まとめ

今後は、SPACe職員として入学前の導入教育、初年次教育をより充実させていくことを目指していく。そして、SPACeだけでなく全学的な体制整備には職員の役割が重要になると感じている。

### 4. ラウンドテーブルを終えて

昨年の大学設置基準の改正で、教員と事務職員等の連携及び協働が法令上明記されたこと、自由研究の「教職協働」にも3件の発表があったためか、関心も高く活発な意見交換が行われた。しかし依然として、職員の教育への関わり方、専門的スキル、仕組みの改善など課題も多いようである。なお、両大学でのピアサポートの取り組みにも話題が集まった。参加者27名。